

## 「どう生きていきたいかを考えること」

私は病院のコロナや疑似症の方を受け入れる病棟で勤務をしています。在宅で療養していた方が肺炎や発熱の症状が出現し、救急要請をされて入院になる方もいます。

つい先日、肺がんで療養をしていた方が入院となりました。化学療法や放射線治療も行っていました。脳にも転移し、今後は積極的な治療はせず、自宅での看取りをする方向で往診医の調整をしている最中でした。肺炎、発熱については治療の効果もあつて酸素投与も不要となり、食事もとれるようになったため、調整途中であった往診医も整え、数日後に自宅退院という状況になりました。

退院の日程が決まり、普段と変わらず過ごされていた日に突然咯血され、酸素投与が開始になり、食止めになるという状況になりました。

急遽、家族を病院にきてもらい、医師と家族で話し合いがされました。

私は「咯血してしまったし、この状況が家で起きてしまったら家族は困るだろうな、きっと退院は延期か中止になるだろう」と思いながら、話し合いに同席をさせていただきました。医師からの状況の説明の後に、家族に対し今後のことを確認したところ「主人は家に帰りたいて思っていると思うので、予定通り家に連れて帰りたと思います。困ることもあるかもしれませんが、訪問看護師さんや今度お世話になる往診医の方に相談していきます。」という言葉が聞かれました。

退院までの数日間で再度咯血することもなく、酸素投与もなしとなり、食事もとれる状態になり退院されていきました。

ACPは健康状態に応じ、繰り返し行われることが必要となっていますが、残された時間についてどのように過ごしていきたいかを話題にすることは「あなたはもう長くないので、どうしたいかを考えてくださいね」というような突き放した感じがしていたため、なかなか取り組みにくい印象がありました。また、病院は治療が行われる場であり、治すことが前提にある中で、限られた時間についてどう考えるか、ということは、治療に対してのあきらめともとられてしまうのではないかと感じていました。

しかし、死は誰にもいつか訪れるものであり、生きているうちに、どう生きていくかを考えることはどの段階にある人にも必要なことだと思いました。退院に至るまでにも、往診医が決めれば退院、など周りの事情だけで話を進めずに、ご本人がどうやって生きていきたいかを確認し、その気持ちを実現できるよう医療者や家族が動くか、ということが必要であったと感じました。

どう生きていきたいか、を確認することができていれば、自宅退院の時期はもっと早くできていたかもしれませんし、家族に迷惑をかけたくないという気持ちからホスピスへの転院と話が変わっていたかもしれません。

自宅への退院後に、想定されていた予後よりも長く生き、家族の方との時間をやりきって過ごしてらっしゃることを願ってやみません。どう生きていきたいかについては、今後関わっていく患者さんや、自分の周りの人、そして自分自身もあらゆる場面で考えていきたいと思っています。